



第34回大会 特別報告

■時 間／16:30～17:00 ■会 場／2F 講堂

テーマ●「国際結婚の社会学 —国際化で日本文化は変わるか?—」

三浦清一郎

第34回大会 特別企画

■時 間／9:00～11:30 ■会 場／2F 講堂

「笑学校」の理論と実践

インタビュー・ダイアローグ&「笑学校」の教育実習

落語、漫才、川柳、狂歌、落首など、「笑い」は日本文化に脈々と流れ続けて来たメッセージの伝え方です。今やサラリーマン川柳やシルバー川柳を知らない人はなく、「お笑い」はテレビの看板番組になりました。時代は、時あたかも「活字離れ」・「講演離れ」の真っただ中で多くの出版社が潰れるという社会的風土が生まれています。

社会教育の関係者はご存知のように、「固い話」に飽き飽きし、「タテマエの講話」にうんざりした人々は、人権講座も男女共同参画講演会も敬遠して、聞いてくれません。学校が工夫してくれる授業参観後の「教育講演会」でさえ保護者は残らなくなりました。

そういう時代の閉塞状況に、矢野氏も「笑学校」も切り込んでいるのです。年400回を越える口演実績も、100名を越える同窓生が集う「笑学校」も、「笑い」を通して、必要なメッセージを伝え、学習や教育にうんざりしている人々の間にコミュニケーションを創造しています。

ユーモアや「笑い」がコミュニケーションの重要要素であるにもかかわらず、日本の教育界は「笑い」を重視したことはほとんどありません。教育における「笑い」は、時に「ふざけ」と同一視され、学習者への「不敬」や「不真面目」の同意語であるかのように受け止められて来ました。もちろん、背景には、「笑いの質」が低かったということもあるでしょう。「ふざけないで!」、「まじめにやれ!」とたしなめられることも多かった筈です。

この特別企画は、コミュニケーションや教育における「笑い」の意味を再考しようという試みです。「笑い」は人々を引きつけ、「笑い」に乗せれば、人権のメッセージも男女共同参画の意図も難なく伝えることができるという事実を突きつけられました。何より「笑い」は人々を和ませ、人々をつなぎ、時に人々を救うこともできます。今回はこの分野の最先端で東奔西走している矢野氏と笑学校の代表をお招きして、笑いと教育の融合についてお聞きします。ついでに、第2部では、教育実践を続けて来た2人の晩学者が、「笑いの世界」の挑戦を受けます。「まじめだけでどこまで通じるか」、「悔しかったら人々を集めてメッセージを伝えてみろ」と言われた時、教育界は対応できるのか?「講義」は「口演」に学ばなくていいのか、矢野氏の「教育解剖学」をお聞きします。

第1部 インタビュー・ダイアローグ 1 (40分)

「笑い」の中にどう「教育的メッセージ」を織り込んで行くのか?

語り手：矢野大和

聞き手：三浦清一郎

第2部 インタビュー・ダイアローグ 2 (40分)

「笑い」の中で何を言えといいうのか?注文の多い二人の晩学者に聞く

語り手：正平辰男(純真短期大学特任教授)

三浦清一郎(生涯学習通信「風の便り」編集長)

聞き手：矢野大和

第3部 (1)「笑学校」の教育実習・・・笑わせたいわ笑学生：三浦佳代子 (20分)

(2) 矢野大和「笑学校」校長の講評・・・「笑い」&「教育的メッセージ」